56

肝臓にたいする認識の変遷
――江戸から明治期にかけて――

大道寺慶子
Research Fellow, University of Westminster

江戸から明治期にかけて，伝統医学における病名の多くは，近代医学の枠組みによって新たな名を与えられ，分類され再編成された．その過程で，変化・消滅した病もある．臓器についても同じである．例えば同じ「肝」の字を冠していても，必ずしも同じ部位・機能を指していたとは限らない場合がある．

本研究は，そうした具体例の一つとして『漢洋病名対照録』（落合泰蔵，1882）を中心に，「肝」の認識が，江戸期から明治期にかけて，どのように変遷したかをたどる．『漢洋病名対照録』によれば，「肝」を具した病気の和名には，肝脹・肝疳・肝血痛などが挙げられる．肝脹は，主にバセドウ病と解され，肝疳は，「おとみやみ，又おとみつわり，ちばなれ，かんのむし，ひかん．腸及び腸間膜腺の瘰癧，及び結核」さらには「腸間膜閉塞，及び腸間膜労，小児痩剤，脾癇」をも指すとされている．肝血痛は，肋骨の痛む病，特に「肋筋リューマチ」と特定された．病の和名を「現代語訳」することによって，肝の病理は解体された．

その一方で，江戸時代に一般的であった「積聚」という病は，様々な肝臓疾患に分割されて命名されている．16世紀の曲名瀬道三は「積聚，癥瘕，痃癖，其名異なるといえども，病は則ち同じ也……積は陰気，聚は陽気……積は実に停蓄の総名のみ」と，積聚を気の停滞による病とみなし，これはほぼ江戸期を通じて一般的な解釈であったと言える．これに対して『漢洋病名対照録』では，「積聚（はらのしこり）」は，胆液，粘液，血液等の留滞，肝臓積血　又は　肝臓鬱血，肝臓炎　又　肝臓〇衝，肝臓間質炎，化膿性肝臓炎，肝臓肥大，肝臓脂肪変質，肝臓豚肉変質，肝臓癌，肝臓胞蟲などに分割された．江戸時代の「はら」の病は，他にも様々な胃腸疾患にも置き換えられている．

こうした過程で，江戸医学では肝臓に起因すると考えられていた病が解体されたり，逆にハラの病が特定の肝臓病として再編成されたりした．同時に肝臓に対する認識そのものも変わったと思われる．江戸時代の肝は，時に「かんの臓」であり，時に「きも」であり，その理解は，近代医学の肝臓とは，必ずしも同じではない．江戸時代の医師達が，或る程度の解剖学的知識に基づいた身体観をもっていたことは，今更言うまでもない．しかし，専門家（医者）と民衆の身体観には，多少のズレがあったであろうことも又，言うまでもない．江戸期の一般的な肝臓のイメージの一例として，『飲食養生鑑』（1850年頃）では，肝は，おもに消化を担う臓器として描かれている．また黄表紙本『十四傾城腹之内』（芝全交，1793年刊）では，肝臓は心臓の召使いで，ヒトの食事や排泄の具合をすべて監視・管理する番頭として描かれている．消化を司る五臓の要として，健全な循環（＝運動／こなれ）が重視された．こうした肝臓の概念が，明治期になって，突然消滅したわけではない．例えば，『按摩術全書』（奈良徳太郎．中浜東一郎閲．東京：南江堂；1906）に「肝臓は身体諸腺中の最大なる者にして一種特有の循環系を有し，毛細管内の圧力甚だ弱きものなり．故に僅少の障害あるも，鬱血し易くして」とあるように，江戸医学に由来する，肝臓における循環の意識はいくらか残っているようでもある．明治以降，近代解剖学の知識を基に医師達が，身体観や病観を再編したことは確かだが，それが民衆レベルまで，到達するのにはもっと時間がかかっただろう．本研究では，こうした推移に焦点を当て，西洋医学の枠組みによって，明治期の人々の身体観・病観が変化した一過程を考察する．